

神事相撲における「大関」の現状

— 富山県氷見市相撲協会への参与観察記録から —

井 上 宗一郎

1 はじめに

1-1 問題の所在と本稿の目的

筆者はこれまで、石川県羽咋市において毎年9月25日におこなわれる、唐戸山神事相撲という行事についての調査をおこなってきた。その結果、唐戸山神事相撲において毎年認定される「大関」が、土俵上では、あらかじめ決められたあらすじに沿って相撲を取り、勝敗をつけず、土俵外の、しかも相撲を取る本人以外の人間の話し合いによって、「大関」間に賞品による格差がつけられていたことが明らかになった。その話し合いでは、それぞれの力士のこれまでの経歴や、現在の力士としての力量、そして当日その力士のために集まった力士の人数の多さなどを説明するという。つまり唐戸山神事相撲では、力士個人間の「物理的な力」が競われているのではなく、その力士の自身が属する社会、もしくは集団内における「社会的な力」とも言うべきものが競われている。そして、唐戸山神事相撲で認定される「大関」は、「社会的な力」ともいうべきものを備えた力士であるという考察に至った⁽¹⁾。

本稿では、この「社会的な力」の一局面をより詳しく見るため、唐戸山神事相撲に参加している、富山県氷見市の氷見市相撲協会とそこに所属する力士たちの活動を報告する。まず、筆者がこれまで調査をおこなってきた唐戸山神事相撲についてその概略を記述する。そして、神事相撲に参加し、「大関」を輩出している富山県氷見市の氷見市相撲協会という組織の概要と活動の記述をおこなう。そこで観察された人々の行動と、語りから相撲協会という組織内における「大関」像を描き出すことによって、「大関」が備え持つと考えられる「社会的な力」を明らかにする糸口としたい。

1-2 調査概要

富山県氷見市は、富山県の北西部にあたり、氷見市東部は日本海、西部は石川県と接している。面積は229.7km²で平成12年度の国勢調査では、56,680人の人口を抱える市である。調査は2003年6月から、10月まで富山県氷見市において延べ4ヶ月間おこなわれた。調査は、富山県氷見市大浦の氷見市運動公園内、氷見市相撲協会所有の休憩小屋に住み込み、参与観察と聞き取りによっておこなわれた。

2 唐戸山神事相撲概略

唐戸山神事相撲は、垂仁天皇の皇子である、現在の羽咋神社の祭神・磐撞別命が、現在の石川県羽咋市で大いに仁政をしき、常に若者たちを集めて武勇を養い、また力の優れた人を招き相撲を取らせ、住民から尊敬されていたことに由来する。その遺徳を慕って、磐撞別命の命日9月25日には北陸各地から力自慢の若者が集まり、相撲を取ったのがこの神事相撲の始まりといわれている。

唐戸山神事相撲では、大相撲やアマチュア相撲が力士を東方と西方の二つに分けて対戦させるように、「上山（かみやま）」と「下山（しもやま）」に力士の出身地別に分けて対戦させる。夕方から始まり、年代別や団体戦などの様々な取組を経て、プログラムは進行していく。神事相撲の最後の取組は、「上山」と「下山」の双方から選ばれた「大関候補」によっておこなわれる。「上山」というのは石川県羽咋市を含む羽咋郡南部、河北郡そして富山県氷見市の3地域で、「下山」は石川県羽咋郡の羽咋市より北部を含む能登地方を指す。「大関候補」は毎年各「山」にて1人ずつ選出される。そして大関候補同士の取組は1回勝負で行われ、必ず勝敗をつけずに、2人の大関が毎年誕生することになっている。

3 氷見市相撲協会

3-1 組織沿革

氷見市相撲協会は昭和40年に設立された団体で、約60名からなる氷見市体育協会加盟団体である⁽²⁾。会長、理事長、事務局長、理事、監事、顧問などの役員が約40名設けられている。

日本には「大相撲」を運営する日本相撲協会と、それ以外の学生やアマチュアによる相撲を管轄する日本相撲連盟がある。実際に取組の勝敗を判定する役目の人間を、「協会」の管轄する場においては「行司」と呼び、「連盟」の管轄する場においては「審判」と呼ぶなどの違いがある。氷見市相撲協会は「協会」という名を持つが、実際には「連盟」の主催する大会などの運営も携わっている。

「なぜ氷見相撲協会なのかっていうと、連盟とは戦うため（相撲を取る）の集団、協会は神事相撲があったり年寄がいたり親方がいたり、ただ相撲を取るだけの集団ではないから。」（36歳 男性）

上述したような語りや、神事相撲は「連盟」ではなく「協会」の管轄であるという語りもよく聞かれた。実際に神事相撲では「審判」ではなく「行司」が勝敗の判定をおこなっている。

相撲協会には大きく分けて事業部、強化部、審判部の3つの部署がある。事業部は、氷見市においておこなわれる相撲の大会の準備や設営などの相撲協会がおこなう活動の運営の中心的役割を担う。強化部は現役の選手も含めて、実際に相撲の練習で本人もまわしを締めて指導にあたり、青年だけでなく小学生の練習の指導もおこなっている。審判部は、氷見市の大会をはじめとして、県内の大会などでも審判を勤めている。相撲協会が保有する施設は、屋外土俵、室内土俵がそれぞれ1つ、そして休憩小屋が氷見市運動公園内にある。

3-2 活動

氷見市相撲協会は、年に1度総会があり、年に数回理事会が開かれる。総会では相撲協会の年間を通した収支報告や事業予定などの報告がおこなわれる⁽³⁾。理事会ではその時々で、問題となっていることについて、理事長以下の役員によって話し合いがおこなわれる。

氷見市相撲協会が主催する相撲の大会は、6月におこなわれる青年と小学生の相撲の大会がある。青年の相撲大会は氷見市の校下青年団⁽⁴⁾ また、昨年からは毎週土曜日に少年相撲教室を始め、小学生を対象に相撲の指導をおこなっている。

中学生に関しては、氷見市には中学校の部活動に相撲部が無いとため、小学校のころに相撲をしていた子や、相撲協会に所属している人の子供などが氷見市内か

ら集められ、氷見市チームとして県大会に出場している。その練習も氷見市相撲協会が引き受けて、指導をおこなっている。

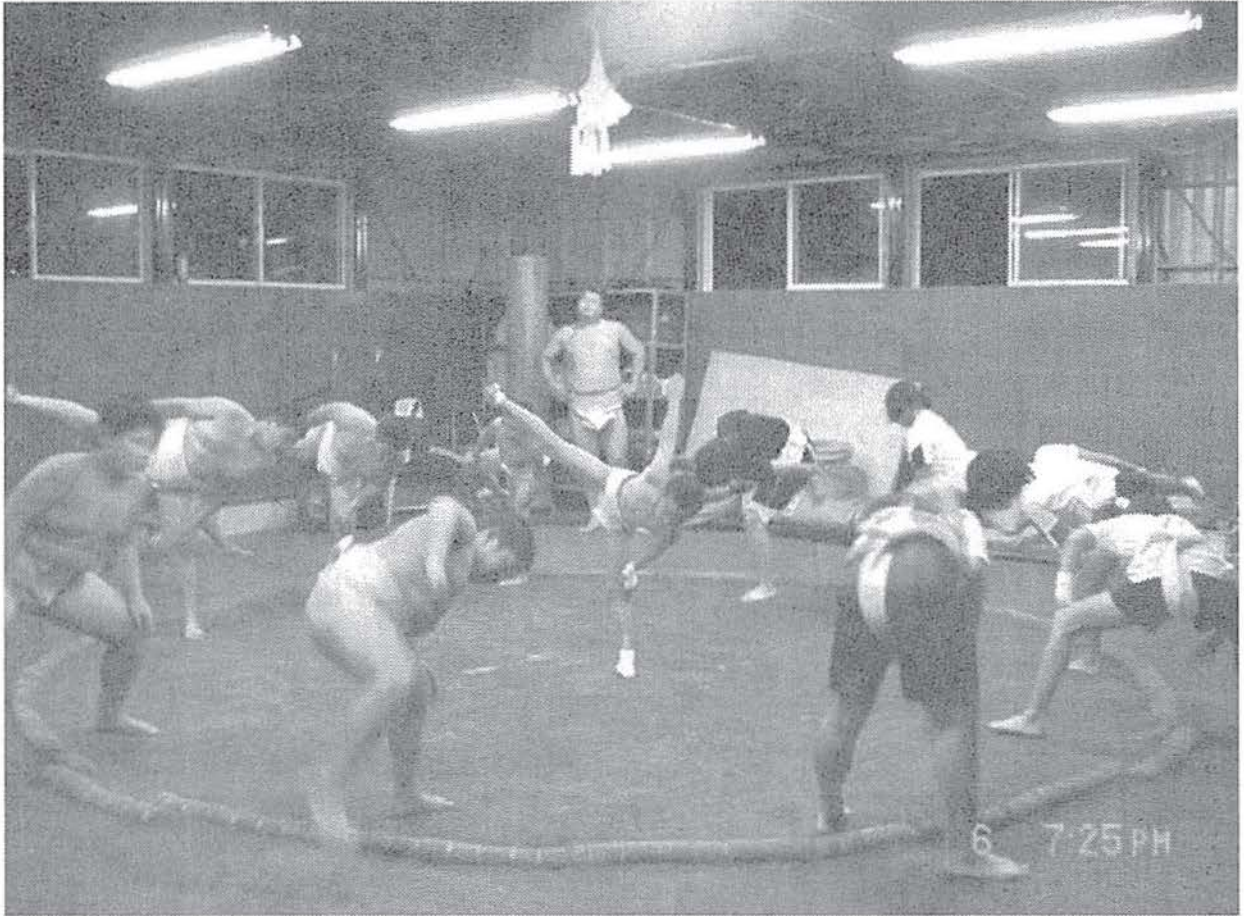
青年は、1年に県レベルの大会が4つ、氷見市の大会が1つある。大会前後になると、小、中学生の指導の傍ら、青年も練習をおこなう。特に8月中旬にある、25歳以下の社会人が出場する大会には力を入れており、大会が近くなるとほとんど毎日のように夜7時から、もしくは9時近くから夜9時過ぎ、時には10時近くまで練習がおこなわれる。

表1 氷見市相撲協会が関わった相撲の大会の内訳と日程（平成15年度）⁽⁵⁾

期 日	大 会 名	参 加 者	場 所
6月22日	氷見市青年相撲大会	青 年	富山県氷見市
7月20日	富山県民体育大会 学童の部	小 学 生	富山県射水郡大門町
7月27日	富山県民体育大会 中学の部 一般の部	中 学 生 青 年	富山県射水郡大門町
8月10日	富山県ちびっこ相撲大会	小 学 生	富山県射水郡大門町
8月17日	富山県青年相撲選手権大会 富山県小学生相撲優勝大会	青 年 小 学 生	富山県高岡市
8月24日	不動岳引退大花相撲	青 年	富山県婦負郡八尾町
9月7日	富山県実業団相撲選手権大会	青 年	富山県富山市
9月21日	全日本小学生相撲優勝大会 北信越大会	小 学 生	石川県金沢市
9月25日	唐戸山神事相撲	青 年	石川県羽咋市
9月28日	全日本新相撲大会	小 学 生 (女子)	大阪府堺市
10月12日	富山県相撲選手権大会	青 年 小 学 生	富山県射水郡大門町
10月17日	蓮華山神事相撲	青 年	石川県羽咋郡志雄町
10月19日	明治記念相撲大会	小 学 生	石川県七尾市

(参与観察の記録をもとに筆者が作成)

表1に氷見市相撲協会の人に関わった相撲の大会を記したが、青年が参加する大会には当然のことながら選手として参加するだけでなく、小学生や中学生が参加する大会にも相撲協会の人たちは引率もしくは応援というかたちで帯同していく。表を見て分かるように、6月から10月にかけては相撲のシーズンとも言えるほど多くの大会や行事が続いているのである。



（富山県氷見市大浦にある氷見市相撲協会所有の室内練習場にて 筆者撮影）

3-3 組織の人々

筆者がおこなった聞き取りによると⁽⁶⁾、相撲協会に入った時の年齢は10代後半が大半を占め、遅い人でも20代前半であった。また、普段の練習に参加したり、練習の指導に頻繁に来ていた人は40代後半から10代後半までの人で、最も多いのは20代後半から30代前半の人であった。

相撲協会に所属している人々は当然のことながらプロではないため何らかの職に就き、アマチュアの力士として活動している。大半が会社員として働いており、そのほかには自営業を営んでいたりと、漁師もいた。

「相撲をやってなかったら話せない人たちと知り合いになれた。地元の青年団の若い（若い人）がいるから練習に来る。そうじゃなかったら毎日はない。」（28歳 男性）

「相撲協会には（年が）上の人に連れてこられた。」（31歳 男性）

「自分の力がどれくらいか試してみたかった。そしたら上には上がいること

がわかって、強くなりたいと思ってくるようになった。」(35歳 男性)

「初めは嫌だったけど、相撲は人を殴りつけて褒められて新聞に載るってある人にいわれて納得して、来るようになった。」(36歳 男性)

氷見市の各地区では青年団活動が盛んで、青年団に入ったばかりの若者は相撲取らなければならないという地区もあり、その時に、相撲協会の人に誘われて本格的に相撲をするようになった人が多かった。

3-4 神事相撲との関わり

氷見市相撲協会の人々が関わった相撲の大会(表1参照)のなかで、不動岳引退大花相撲、唐戸山神事相撲、蓮華山神事相撲、明治記念相撲大会の4つは、他の競技相撲の大会とは異なった位置付けがなされている。まず、これらの相撲は「連盟」の管轄ではなく、すべて主催している組織が「協会」である。次に、相撲協会の人々がこれらの相撲のことを総称して「花相撲」と呼ぶ。「花」とは、祝儀のことを指し、氷見市でおこなわれる獅子舞などで、祝儀を渡すことを「花をうつ」と表現する。事実、「花相撲」に力士として出場すると日当が与えられる。若い人たちからは「花相撲はまわしかいて(締めることを意味する)座っただけで日当があたる。」という言葉がよく聞かれた。ここでは競技相撲以外の、神事相撲も含む相撲を総称して「花相撲」とされていた。

富山県婦負郡八尾市でおこなわれた不動岳引退大花相撲はその名前のとおり、不動岳という力士が引退するということでおこなわれた「花相撲」である。実際に筆者は力士として参加したところ、日当1万円が与えられた。この相撲は他の3つのような神事相撲ではないが、そのプログラムは神事相撲とほとんど同じように展開されていた。



（明治記念相撲大会 石川県七尾市 愛宕山相撲場 筆者撮影）

唐戸山神事相撲以外の蓮華山神事相撲や明治記念相撲大会も、相撲協会の人々にとって1つの「花相撲」というくくりにあるだけでなく、唐戸山神事相撲と同じようにやはり「大関」が認定される。筆者が参与観察をおこなった2003年の蓮華山神事相撲では氷見市相撲協会の力士の中から「大関」認定された。蓮華山「大関」となったのは相撲協会強化部長で40歳会社員のY氏であった。唐戸山神事相撲の「大関候補」がおこなう取組は先述したように、一番勝負で両者同体となり勝敗の判定が下されることなく両者「大関」に認定される。蓮華山神事相撲では「大関候補」は1人で、その取組も「大関候補」が必ず勝つことになっており、当然「大関」は1人しか認定されない。実際に筆者は氷見市の力士として蓮華山神事相撲に参加したのであるが、Y氏は土俵に上がり、相手を土俵外に寄り切って勝利を収めて蓮華山「大関」となった。

4 小 括

4-1 組織内の「大関」

「大関」は、相撲の成績や技術などの「身体的な力」の充実は当然であるが、後輩の指導や相撲の振興に努めるといった人間性なども問われる。とくに「心、技、体」を兼ね備えている人がふさわしいとされている⁷⁾。現在の氷見市相撲協会には、唐戸山神事相撲などの神事相撲で「大関」を獲得した人が約10名在籍している。実際の日常的な活動における決定権を持っている理事長の役にも、平成15年現在、やはり唐戸山神事相撲で「大関」を獲得した人が就いている。

神事相撲で「大関」となった力士は「親方」となり、それ以降は力士として参加はしない。また、富山県氷見市を含む唐戸山神事相撲参加地域では、唐戸山神事相撲で「大関」を獲得した力士はこの地域のどこに行っても「親方」として扱われるが、その他の神事相撲で「大関」を獲得した力士は、その神事相撲においてのみ「親方」として扱われる。

しかしながら、氷見市相撲協会が筆者が参与観察をおこなっている際には、神事相撲で「大関」を獲得した人だけに「親方」という呼称を用いるわけではなかった。基本的には、25歳以上になると、選手としてだけではなく稽古をつける役目もまかされる。これは25歳以下の力士が出場する、富山県青年相撲選手権大会が基準となっており、この大会に出られる限りは選手として年上の力士に稽古をつけてもらう。若い人たちの間では、「25歳以上になると親方になる」ということも語られていた。しかしながら、まわしを締めることは無いが、指導にあたる人で年齢が30代後半から上の人たちを総称して「親方」という表現がよく用いられていた。

「唐戸山（神事相撲）で大関とった人が何人今も後輩の指導しとる？ ほとんどいないだろ？ 俺は大関なんていらん。年とっても若いもんにも負けてもまわしをかい（つけて）いたい。」（36歳 男性）

「大関は欲しくない。上の人から話がきても断るよ。お金かかるし、（大関を）とったとこで何になる？（どんな人に大関をとって欲しいかとの筆者の質問に対し）大関とっても天狗にならずに練習に来てくれる人かな。」

（31歳 男性）

「地元で力士を集めたり世話したりしている人がなればいい。俺はいらない。」

（34歳 男性）

「もちろん実力があることも重要だけど、普段の練習によく顔を出すとか、（大関に選ばれた時に）若いもんが付いて応援したくなるような人になって欲しい。」（48歳 男性 大関獲得歴有り）

以上の語りは、年齢的にも次に「大関候補」として名前が挙がってもおかしくない年代の人たちである。最後に記述した「大関」を獲得したことのある48歳のN氏も、N氏が33歳の時に唐戸山神事相撲で「大関」になっている。若い人たちは「大関」になることに対してみな消極的な意見が聞かれた。その中でも、金銭的な負担の大きさが最も多く挙げられた。

これは、特に唐戸山神事相撲で「大関」になった力士は、地元で何らかの形でそれを披露しなければならないからである。基本的にそれは、「花相撲」という形式が多い。「花相撲」では参加した力士たちに日当を支払うだけでなく、招待した「親方」、行司の人たちへの日当、中入りで使われた「親方」たちの化粧まわしのクリーニング代などで非常に費用がかかる。その額は数百万とも言われている。

また、36歳のM氏が語ったように、「大関」になった人たちは、頻繁に練習に顔を出す人もいたが、練習自体は「大関」になっていない、30代前半の人たちがイニシアチブをとっていた。実際筆者が参与観察をおこなっている際も、人にもよるが、「大関」を獲得した人で練習に顔を出し、後輩の指導にあたっていた人は数人だけであった。

若い人たちの間では、一見、「大関」になることに消極的になっているように感じられる。それは、「大関」になった後の披露において、金銭的な負担が大きいことや、「大関」が普段の練習にあまり顔を出していないことが原因であると考えられる。だが、彼らの語りからは、「大関」になることで問われる品位や、その存在の重要性が認識されていることが窺える。

4 まとめ

本稿は「大関」という存在の輪郭を、氷見市相撲協会という組織の姿を通じて描き出すことを試みた。まず言えることは、相撲そのものに対する意識の変化が挙げられる。相撲協会に入るきっかけを見ても分かるように、相撲をしたくて相撲協会に入ってきた人はほとんど見られなかった。以前は若者の娯楽として相撲を取ることに、そして相撲が強いということが価値を持っていた時代もあった。しかし現在の若者にとって相撲というものの自体娯楽としての価値は薄れ、競技人口も減っている。また、会社員の力士が大半を占める中で、1年の半分以上もの期間を相撲に関わる行事に時間を費やし、相撲のために財産を投じるというのは困難な時代になってきている。

若い世代の力士たちは、「大関」になること、さらには「大関」という「称号」自体に魅力を感じていないようにも見える。しかし、時代や状況は変化しても、若い力士たちにとっての「大関像」のようなものが見えた。それは、相撲の技術や強さは当然のことながら、「経済力」であったり、若い人たちを惹きつけ、組織をまとめる「政治力」や「人望」といったものを備えた力士が、相撲協会が求める「大関像」といえるのではないだろうか。そしてこの「大関像」は神事相撲の「大関」が備え持つ「社会的な力」の一要素でもあると考えられる。

注釈

- (1) 拙稿「神事相撲に見る「社会的な力」—唐戸山神事相撲における「大関」の条件から—」『日本民俗学』（印刷中）2003
- (2) 財団法人氷見市体育協会編『創立四十周年記念誌』1993
- (3) 平成15年度氷見市相撲協会総会資料を参考に記述した。
- (4) 氷見市の青年団には大字ごとの青年団と、各小学校の校区ごとの青年団である校下青年団が組織されている。
- (5) 6月22日以前に、氷見市の校下青年団でおこなわれた相撲大会が2回と、小学生が参加した氷見市の大会があるが、筆者が参与観察に訪れる以前におこなわれており、日程等の詳細が不明のため記載しなかった。

- (6) 相撲の練習に参加、指導のために来ていた15人に対して筆者が聞き取りをおこなった結果をもとにしている。
- (7) 拙稿 前掲論文「神事相撲に見る「社会的な力」―唐戸山神事相撲における「大関」の条件から―」2003

（いのうえ そういちろう 比較人文学専攻）